駅長

宮沢賢治

ことことと行く汽車のはて
温石いしの萱山の
上にひとつの松ありて
あるいは雷にうたれしや
三角標にまがへりと
大上段に真鍮の
棒をかざしてさまよへり

ごみのごとくにあきつとぶ
高圧線のま下にて
秋をさびしき白服の
酒くせあしき土木技手
いましも汽車を避け了へて
こなたへ来るといまははた
急ぎガラスを入りにけり

底本：「新修宮沢賢治全集　第六巻」筑摩書房
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

月天讃歌（擬古調）

宮沢賢治

兜の尾根のうしろより
月天ちらとのぞきたまへり

月天子ほのかにのぞみたまへども
野の雪いまだ暮れやらず
しばし山はにたゆたひおはす

決然として月天子
山をいでたち給ひつゝ
その横雲の黒雲の
さだめの席に入りませりけり

月天子まことはいまだ出でまさず
そはみひかりの異りて
赤きといとど歪みませると

月天子み丈のなかば黒雲に
うづもれまして笑み給ひけり

なめげにも人々高くもの云ひつゝ
ことなく仰ぎまつりし故
月天子また山に入ります

　　兜の尾根のうしろより
　　さも月天子
　　ふたゝびのぞみ出でたまふなり

月天子こたびはそらをうちすぐる
氷雲のひらに座しまして
無生を観じたまふさまなり

月天子氷雲を深く入りませど
空華は青く降りしきりけり

月天子すでに氷雲を出でまして
雲あたふたとはせ去れば
いまは怨親平等の
ひかりを野にぞながしたまへり

底本：「新修宮沢賢治全集　第六巻」筑摩書房
　　1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

函館港春夜光景

宮澤賢治

地球照ある七日の月が、
海峡の西にかかって、
岬の黒い山々が
雲をかぶってたゞずめば、
そのうら寒い螺鈿の雲も、
またおぞましく呼吸する
そこに喜歌劇オルフィウス風の、
赤い酒精を照明し、
妖蠱奇怪な虹の汁をそゝいで、
春と夏とを交雑し
水と陸との市場をつくる
　　……きたわいな
　　つじうらはっけがきたわいな
　　オダルハコダテガスタルダイト、
　　ハコダテネムロインデコライト
　　マオカヨコハマ船燈みどり、
　　フナカハロモエ汽笛は八時
　　うんとそんきのはやわかり、
　　かいりくいっしょにわかります
海ぞこのマクロフィスティス群にもまがふ、
巨桜の花の梢には、
いちいちに氷質の電燈を盛り、
朱と蒼白のうっこんかうに、
海百合の椀を示せば
釧路地引の親方連は、
まなじり遠く酒を汲み、
魚の歯したワッサーマンは、
狂ほしく灯影を過ぎる
　　……五がつははこだてこうえんち、
　　　えんだんまちびとねがひごと、
　　　うみはうちそと日本うみ、
　　　りゃうばのあたりもわかります……
夜ぞらにふるふビオロンと銅鑼、
サミセンにもつれる笛や、
繰りかへす螺のスケルツォ
あはれマドロス田谷力三は、

ひとりセビラの床屋を唱ひ、
高田正夫はその一党と、
紙の服着てタンゴを踊る
このとき海霧（ガス）はふたたび襲ひ
はじめは翔ける火蛋白石や
やがては丘と広場をつゝみ
月長石の映えする雨に
孤光わびしい陶磁とかはり、
白のテントもつめたくぬれて、
紅蟹まどふバナナの森を、
辛くつぶやくクラリオネット

風はバビロン柳をはらひ、
またときめかす花梅のかほり、
青いえりしたフランス兵は
桜の枝をさゝげてわらひ
船渠会社の観桜団が
瓶をかざして広場を穫れば
汽笛はふるひ犬吠えて
地照かぐろい七日の月は
日本海の雲にかくれる

底本：「日本随筆紀行第二巻　札幌｜小樽｜函館　北の街はリラの香り」作品社
　　1986（昭和61）年4月25日第1刷発行
底本の親本：「校本　宮澤賢治全集　第三巻」筑摩書房
　　1975（昭和50）年6月

〔ひとひははかなくことばをくだし〕

宮沢賢治

ひとひははかなくことばをくだし
ゆふべはいづちの組合にても
一車を送らんすべなどおもふ
さこそはこゝろのうらぶれぬると
たそがれさびしく車窓によれば
外の面は磐井の沖積層を
草火のけむりぞ青みてながる

屈撓余りに大なるときは
挫折の域にも至りぬべきを
いままた怪しくせなうち熱り
胸さへ痛むはかつての病
ふたゝび来しやとひそかに経れば
芽ばえぬ柳と残りの雪の
なかばはいとしくなかばはかなし
あるいは二列の波ともおぼえ
さらには二列の雲とも見ゆる
山なみへだてしかしこの峡に
なほかもモートルとゞろにひゞき
はがねのもろ歯の石噛むま下
そこにてひとびとあしたのごとく
けじろき石粉をうち浴ぶらんを

あしたはいづこの店にも行きて
一車をすゝめんすべをしおもふ
かはたれはかなく車窓によれば
野の面かしこははや霧なく
雲のみ平らに山地に垂るゝ

底本：「新修宮沢賢治全集　第六巻」筑摩書房
1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行